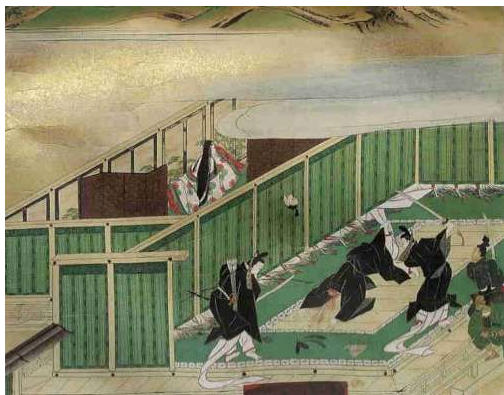


茜色の歌姫



第一部 乙巳の変



多武峰縁起絵巻

戊申に、天皇大極殿におはしに御ます。古人大兄侍りはべ。中臣鎌子連、蘇我入鹿臣の、人と為り疑い多くして、
昼夜剣持けることを知りて、俳わざおき儼に教へて、方便たばかに解かしむ。入鹿臣、咲わらひて剣を解く。入りて座に
侍り。(中略) 中大兄、子麻呂等の、入鹿が威に畏れて、便めんら旋ひて進まざるを見て曰わく、「咄やあ嗟」との
たまふ。即ち、子麻呂等と共に、出其不意ゆくりもな、剣を以て入鹿が頭肩やがを傷り割そこなふ。入鹿、御座に転び就き

て、叩頭みて曰さく、「当に嗣位に居ますべきは、天子なり。臣、罪を知らず。乞ふ、垂審察へ」とまうす。天皇大きに驚きて、中大兄に詔して曰はく、「知らず、作る所、何事有えりつるや」。中大兄、地に伏して奏して曰さく、「鞍作、天宗を尽し滅ぼして、日位を傾けむとす。豈天孫を以て鞍作に代えむや」とまうす。天皇、即ち起(た)ちて殿の中に入りたまふ。佐伯連子麻呂、稚犬養連網田、入鹿臣を斬りつ。是の日に、雨下りて潦、水庭に溢めり。席障子を以て、鞍作が屍に覆ふ。〔日本書紀〕

卷第二十四)

第二章 飛鳥へ

664

秋となった。

山間に広がる田に、早乙女どもが、腰の高さに実った稲穂を刈り、男どもが藁を編んだ袋に詰め、蔵へと運んでいた。

「皇子はすでに聞きたまえるや？」

大海人皇子と、肩を並べて畦道を歩んでいた海部石床が言った。

「何を」

問い返す皇子に、石床は眉根を顰めた。

「飛鳥の都で、宝大王が詔を出された。新たに王宮を建てるため、諸国の壮丁を差し出せ、と」

壮丁とは、労役に耐えうる年齢の男子を言う。

「稲の刈り入れが終わればすぐに、差し出せとのこと」

「飛鳥の民のみでは足りないのか」

大海人皇子は首を傾げた。飛鳥の都には、様々な宮や寺が数多く建てられていると聞いていた。その造営には、都のある飛鳥に近くにすむ民が使役されているはずだった。他国の民を、飛鳥のために徴発した例はない。

「この伊勢だけではない。越や吉備、出雲、さらには、濃にも、命じられた」
「濃にも？」

濃の国は、伊勢の東隣にある尾の国の北にある。伊勢の海部家は、舟を操って濃や尾と交易し、親しい関係にある。だが、濃や尾は、飛鳥の大王家に服属する諸国からなる大和の外にあつた。大王家の詔に否応なく服さねばならぬ謂われはない。

「しかも、その数が……」

石床は、稲の袋を抱えて畦道を通り過ぎる民に目をやり、声を潜めた。

「ひとつの国につき、五百人を差し出せ、と」

「五百人？」

皇子は驚いた。すべてを合わせれば数千。それだけの民を動員して立てられる宮とは、どれだけの大きさになるのか。

「今の大王家は、唐や新羅と折り合いが悪い。それらの国の使節に侮られぬためにも、巨きく、煌々（きらきら）しい宮が要るとのことだが……」

石床は、貌をしかめて続けた。

「五百もの壮丁を差し出せば、民の暮らしは成り立たない。稲の刈り入れは終わったが、魚介や山菜、木の実を干し、冬に備えて蓄えねばならぬ時。しかも、五百の糧や道具は、すべてそれぞれの国が調えねばならぬ。とても応じられるものではない」

「長は……」

大海人皇子は問うた。

「随うのか？」

「わからぬ。ただ……大王家は、多くの民に武器を持たせて鍛え、千を越える軍を持ちたまう。逆らえば、討たれる」

沈み込んだ皇子に、石床は続けた。

「五日の後、飛鳥より使者が来る。王宮に仕える采女を差し出せ、との命があり、長は伊勢のうちに、見目麗しい乙女を求め集めている。長は、多くの采女を差し出すことで、壮丁の数を減らすとしてしている」

石床は、ためらいがちに言った。

「長は……巫那を差し出す心づもりらしい」

貌を上げ、眼を見開いて腕をつかんだ皇子に、石床は言った。

「止められるとすれば、大王家の血を引く、皇子のみぞ」

借り入れの巡見を終え、宮に戻った大海人皇子のもとに、海部の長が訪れた。

板の間に立て膝をつき拝礼した海部の長に、巫那が、蒸した米を運んで来た。

長の傍らには、その娘、比羽が座っていた。巫那は、不審げに比羽に眼をやり長の前に額ずいた。

「新米である」

皇子は言った。刈り入れたばかりの米を、その地を統べる長にまず供するのが、習わしであった。

海部の長は、土器かわらけに盛られた蒸し米を押し頂き、口に運んだ。やがて、酒と、干し魚や蒸し栗が運ばれ、宴となった。

「皇子よ」

しばし語らった後、海部の長は、巫那に眼をやった。

「皇子とただ二人、語りたいことが」

長は、傍らの娘に眼くばせをした。比羽は心得貌に、部屋を出た。皇子の傍らで酒を杯に注いでいた巫那は、惑い貌で皇子を見た。皇子は頷き、巫那は不安げな面持ちで拝礼し、去った。

「皇子は、すでに聞きたもうや？」

二人の乙女の足音が遠ざかったのを確かめ、長は声を低めた。

「何を」

「飛鳥の大王より、壮丁五百を差し出せ、との詔がくだった」

皇子は頷いた。

「大王の詔に逆らえば、あるいは軍いくさともなる。それは避けたい。とはいえ、五百もの壮丁を差し出せば、伊勢は立ちゆかぬ」

海部の長の沈鬱な面差しに、皇子は頷くしかなかった。

「幸い、五日の後に、伊勢に采女を求めた使者が来る。求めた数は一人だが、吾は、三人の美みまし乙女を差しだし、さらに使者に財たからを持たせ、差し出す壮丁の数を、減らしたい」

皇子は、石床から聞いた言葉を思い出し、胸を鷲掴みにされたような息苦しさを覚えた。

「広く伊勢を見渡すに、もつとも美まし乙女は……」

皇子は、ぎゅっと拳を握りしめた。

「皇子にお仕え参らせる、巫那」

総身の血が凍り、指先が細かく震えるのを、皇子は抑えられなかった。

「皇子には、吾が娘、比羽を妻め合わせ奉る。故に巫那を、飛鳥の都に遣ゆることを赦ゆるされたまえ」

長は、苦々しげな面持ちをつくり、深々と拝礼した。

「吾ら海部のため、伊勢の民のために」

「巫那」

海部の長と比羽が帰った後、並べられた土器を片づける巫那に、大海人皇子は、吐き出すように言った。

巫那は、杯を取り上げた手を止め、床に膝をつき、俯いた。

「汝は、飛鳥の都を見たいか」

巫那は、貌を背けた。その肩が細かく震えていた。

「わけを……」

皇子は、巫那に駆け寄りたいたいを抑えて、低く呟くように言った。

「知っているのか」

巫那は頷き、そっと腕を貌に当てた。

「比羽から、聞いたのか」

巫那の膝に、滴しずくが垂れた。

「巫那は……諾したのか」
皇子の問いに、巫那は立ち上がり、貌を向けた。涙に濡れた眼が、大きく見開かれ、唇が震えていた。

「皇子は、吾を飛鳥に遣りたいのか？」

悲痛な叫びに似た問いに、皇子は口を噤んだ。

「飛鳥の大王は、諸々の国の民を求め乙女を求める。娘を飛鳥に遣らねばなぬ親ども、夫と別れる妻ども、父と離される子ら、彼等の悲しみをかえりみず、何のために、新たに宮を建てるのか？」

巫那は、皇子の前に膝をつき、その肩を掴んだ。

「皇子は、さような大王家の意に随うのか？」

皇子は、腕を伸ばし、巫那を抱こうとした。巫那は、皇子の胸ぐらに手をあて、突き飛ばした。そのまま、部屋を走り出た。

皇子は、しばし、虚ろな眼差しで、坐したまま動かなかった。

何も出来なかった……。

大王家の血を引く皇子？

飛鳥の大王家から、なんらかえりみられる事もない吾が、皇子？

大海人皇子は、傍らの杯をつかみ、庭に投げた。土器の碎ける音が、虚しく響いた。

都よりの使者は、飛鳥より河を伝って舟で来る。

五十鈴川の畔、志摩の地に津が設けられ、海や川を渡って訪れる他国の舟が集まってくる。

その日、志摩の津に近い原に、宴の席がしつらえてあった。四つの柱が正方形に立てられ、幕が張られ人の出入りを禁じた。上座には筵が敷かれ、下座に、海部の長の一族が坐し、飛鳥よりの使者を待っていた。

やがて、楽の音とともに、伴部や兵を連れて現れた使者は、その名を、膳臣と言った。膳は、大王の宮の食物を司る一族だが、一方で宮に仕える采女を調える役も負う。

白い丸貌にうすい髭を蓄え、膨らんだ腹をしきりに撫でる膳臣は、次々に差し出される干し鮑や昆布などの海産物、さらに、志摩の津にもたらされる東国の珍宝に、眼を細めていた。

「さて」

膳臣は、甲高い声をだした。

「海部の長よ、すでに采女は選び了えたのか？」

「然り」

海部の長は、心得貌に頷いた。

「鄙とは言え、探せばいるもの。選り抜きの美し乙女を調えた。三人の乙女を、選ばれよ」

「三人？」

膳臣は、不審げな貌を作ってみせた。すでに、海部の長は、飛鳥から下ってくる膳臣に使者を送り、飛鳥に差し出す壮丁を減らす事と引き替えに、采女の数を三人にすることは、伝えてあった。

「采女は国ごとに一人、との大王の詔であるが……」

「まずは、見られよ」

海部の長が合図すると、十人の乙女が白幕をくぐって現れ、膳臣の前に膝を突いた。海部の長は、膳臣ににじり寄り、耳打ちした。

「三人を選ばれよ。さらに、今宵、寝屋をとみにされる乙女をも」

膳臣は唇を曲げて領き、立ち上がった。横一列に並ぶ十人の乙女を、ゆっくりと確かめた。俯いた貌の顎をつまんで上げさせ、胸乳に触れ、もつともらしく領いたり、首を傾げたりした。

ふと、膳臣は歩みを止め、眼を輝かせた。

「美まし乙女なるかな」

貌を背ける乙女を、背を丸めて覗き込んだ膳臣は、不意に面差しを引き締め、海部の長を見た。

「この乙女の齢は？」

「十二」

「采女となすには稚いが」

膳臣は、乙女の胸元の衣に指を差し入れ、軽くめぐり、なかの胸乳を覗き込んだ。

「磨けば、一年の後に、玉となって光るであろう」

膳臣は、胸元をまさぐる膳臣の指に、乙女が歯を食いしばり、左右の拳を握って耐えているのを見やり、飛鳥の大王家の意を背負った己が威光に満足するように領いた。指を胸元から抜いた膳臣は、威を取り繕い、言った。

「汝が名は？」

「巫那、やめよ！」

海部の長の傍らに坐していた大海人皇子が叫ぶのと、乙女が膝を突き上げるのは、同時であつ

た。

「汝ごときに告げる名はない！」

したたかに膝蹴にされ、膳臣は呻き、両手で股間を押さえ、うずくまった。

「巫那！」

大海人皇子が飛び出すより早く、膳臣の兵どもが、矛を構えて巫那を囲んだ。九人の乙女たちは悲鳴をあげてひれ伏し、海部の者どもは、なすすべなく狼狽するばかりであった。

「大王が使者に害をなす逆賊！」

膳臣が苦痛に涙をこぼしつつ、喚いた。

「討て！」

兵の一人が、矛を突きだした。巫那は、突き出された矛先を脇にかいこみ、足をあげて兵の股間を蹴った。悲鳴をあげて倒れる兵から矛を奪い、次々と繰り出される余の兵の矛を薙ぎ払い、立ち上がることもできずに呻く膳臣の喉元に矛先を突きつけ、叫んだ。

「寄れば、汝等が主は死ぬ！」

膳臣は、ますます募る激痛に、声を発することもできず、右手を振りながら、兵どもに下がるよう合図した。兵どもは、矛を収めて下がった。

「皇子！」

巫那は、膳臣に矛を擬しながら、叫んだ。眼に涙が溢れていた。皇子は立ち上がり、しかし身動きもせず、呆然と立ちつくしていた。

「吾を……」

巫那は、眼をつむり、膝を折り、総身を振るわせ、絞り出すように絶叫した。
「助けて！」

「おもしろき乙女かな」

矛を投げ出し、地に両膝を突き、貌を覆った巫那に、膳臣の兵どもが再び矛を構えて寄ろうとしたとき、上座から声があがった。

立ち上がったのは、女だった。

薄紅色の衣に、スカート 裳ではなく袴ズボンをはき、腰に剣を提げている。長い髪を結わず、後頭部で結んで、馬の尾のように垂らしていた。

齢は二十歳ばかりか。細長く弧を描く眉の下に、切れ長の美しい眼だが、瞳の色の薄さが、どこか冷やかな風情をたたえていた。

「膳臣よ」

女は、しゃがみこんだまま悶える膳臣に歩み寄り、見下ろしつつ言った。

「汝に、この乙女は扱えまい。飛鳥に還るまでに、汝がふぐり、碎かれずにはすむまい」

膳臣は、貌をあげることもできず、俯いたまま女の蔑みに耐えた。

「この乙女、吾が預かる」

何か言いかけた膳臣に背を向け、女は、海部の長を見やった。

「いやしくも大王家の使者に抗ったこの乙女、否、海部の者として、無事にはすむまい。吾にこの

乙女を委ねるならば、何事もなく収めてみせよう。如何か」

海部の長は左右を見、おずおずと問うた。

「汝は……？」

「吾は、宝大王の宮に仕える鏡郎女かがみのいらつめ」

「大王の宮……されば、采女？」

「采女ではない」

鏡郎女は、腰の剣の束を叩いた。

「采女が剣など、帯びるものか」

刺すような物言いに、海部の長は気圧されつつ、問うた。

「巫那を如何しよう……？」

「飛鳥の都へ随ともれてゆく。さらには問うな」

鏡郎女は、巫那に貌を向けた。

「汝はさきほど、皇子、と叫んだな」

巫那は、鏡郎女を凝視しつつ、油断なく矛先を膳臣に擬したまま身構え、応えようとはしなかった。

不意に、鏡郎女は剣に手をかけた。目にもとまらぬ早業で剣が一閃し、巫那が手にした矛の先端がきれいに切り落とされた。巫那はさつと飛び下がった。その鼻先を、剣のきつさきがかすめた。

さらに郎女は、剣を地面と水平に構えて突き出した。

巫那はさらにかわし、先端を切られた矛を突き出した。矛は、郎女の袖を縫った。郎女はかま

わず踏み込み、脚を跳ね上げ、巫那の胸乳をしたたかに打った。

悲鳴をあげ、両腕で胸を抱えて身を折る巫那のうなじに、郎女の肘が打ち込まれた。巫那はうずくまった。

「やめよ！」

上座から躍り出た大海人皇子に、鏡郎女は息ひとつ乱さず、涼やかな眼を向けた。

「皇子にあらせられるか」

郎女は片膝を突いて拝礼し、再び貌をあげて微笑んだ。

「伊勢に、大王家の皇子がいますとは、初めて聞いた」

大海人皇子は、唇を引き結び、苦々しげに郎女を一瞥すると、うずくまる巫那に駆け寄った。

「巫那！」

巫那はやつと貌をあげた。眼から涙が溢れ、唇が苦しげに歪んでいた。

「何故に」

巫那は呻いた。

「吾を助けなかった……」

火照っていた皇子の貌が蒼ざめた。巫那は俯き、それきり皇子を見ようとはしなかった。

「乙女よ」

鏡郎女が静かに問うた。

「汝が父母は？」

巫那は応えず、皇子は首を横に振った。郎女はうなずき、続けた。

「ならば汝は、強くあらねばならぬ。より強く、吾よりもさらに強く」

巫那は、貌の半ばを郎女に向けた。瞳が動かず、郎女を見つめていた。

郎女は手を差し伸べた。

「吾に勝てるほど強くなりたければ、ともに飛鳥の都に来よ」

その夜。

志摩の津に近い海部の別邸での宴は、中止となった。膳臣は、股間の痛みが去らず、高熱を発して寝込み、しばし療養することとなった。薬師や呪人が呼ばれ、別邸は祈禱の声に満ちた。

ふぐりが瓜の実ほどにも膨れているらしい……。

もはや、使い物にはならぬか。

恐ろしき乙女よ。

海部の者どもは囁きあい、忍び笑いを漏らし、あるいは、事がどのような結果をもたらすか不安げであった。

大海人皇子は、独り喧騒を嫌い、寝屋から月を眺めて過ごし、朝になるまで動かなかつた。

巫那は、鏡郎女とともに、いずくかに消えた。その行方を、海部の者は誰一人として知らない。眼を見張り、涙を溢れさせ、巫那は明らかに、皇子を責めていた。いくら追い払おうと、その眼が脳裏に焼き付いて消えない。

「皇子よ」

寝屋の外で、海部石床の声が出た。

「入ってもよいか」

「諾」

海部石床は板敷きの床に片膝を突いて坐し、こう告げた。

「津の者に聞いた。巫那は昨夜、鏡郎女とともに、舟にて発つたらしい」

皇子は、震える貌を見せまいと、石床に背を向けた。

「いづくに向けてか……」

「分からぬ」

石床は、皇子ににじり寄った。

「このまま巫那を、飛鳥へ行かせられるのか」

「巫那がそう希んだのなら……」

皇子は俯いた。

「皇子が止められれば、巫那は行かなかった」

「吾に、止める術はない」

「巫那を追われるならば、すぐに舟を仕立てる」

「追うて、如何する」

「皇子は、巫那を恋うてはおられぬのか？」

石床は、皇子の肩を掴んだ。

「吾が皇子なら、恋うた乙女は、理のあるなしに関わらず、追う」

皇子は振り返って石床を見た。じっと石床を凝視し、頷いた。

「舟を……疾う！」

志摩の津の漁人どもは、すでに寝入っていた。石床は見知った漁人を屋の戸を叩いた。

「都より来た女が、乙女とともに舟に乗ったそうだな」

やっと舟の綱を解いて漕ぎ出した漁人に、石床が問うた。頷く漁人に、皇子が問うた。

「彼等は、いづくへ向かった」

漁人は權を動かしながら応えた。

「乙女の母に会おうと」

標縄の張られた崖に着いたとき、すでに日が没しかけていた。

禁忌の地に足を踏み入れることを躊躇う石床を残し、皇子は独り、崖を登った。あの日、小楯の伴部が張った縄は、そのまま垂らされていた。

崖を登り終え、阿礼の住む洞に向かった。

阿礼は独り、腰に垂れる長い髪を海風になびかせ、皇子を待ち受けるかのように洞窟の入り口に腰を掛けていた。

「巫那は、すでに発った」

間に合わなかった……。

皇子は、抑えに抑えていた疲れが、身の裡より溢れ出るのを覚えた。四肢の力が抜け、岩場に座り込んだ。

「皇子は必ず来る、それまで待てと言ったが、聞かなかった」

阿礼は立ち上がり、皇子の傍らに坐した。皇子は、打ちのめされ、俯いたままだった。

崖下で、波が砕ける音のみが響いていた。いつしか洞の前に並んで座った二人は、眼が見える皇子も見えぬ阿礼も、いつしか同じ方角に貌を向けていた。その先には、海だけが拡がっていた。

「阿礼よ」

やがて皇子が問うた。

「鏡郎女なる飛鳥の女には会ったか？」

「会った」

「鏡郎女は、飛鳥の都で、巫那に何をさせるのか、阿礼は聞いたか？」

阿礼はしばし口を嚙み、やがて言った。

「巫那が行くと言った。故に行かせた」

皇子はしばし阿礼を見つめた。臉を閉じた貌からは、何の感情も伺えなかった。

「止めなかったのか？」

やつと問うた皇子に、阿礼は、冷ややかに応えた。

「皇子は止めたのか？」

あのととき……。

吾を……。

膳臣の喉元に矛を突きつけ、眼から涙を流しながら、巫那は叫んだ。

助けて！

皇子は、何もしなかった。

何故に？

巫那が抗^{あらが}った相手は、膳臣ではない。膳臣が引きつれた兵どもでもない。彼女を、膳臣に差し出そうとした海部の長でもない。

巫那は、おとなしく膳部と寝屋をともにするしかなかった。それが、五百の壮丁を差し出せと無理強いされた伊勢を救う手立てであったろう。海部の長は、決して無慈悲ではない。巫那を憐れみつつ、伊勢の民を思い、一人の乙女を犠牲にするしかなかった。あの場で、巫那を救うため大王の使者に抗えば、如何なる災厄が伊勢の民に降りかかったか。

そもそもは、飛鳥の大王の詔が、巫那を悲しみに陥れた。大海人皇子は、大王家に連なる皇子。確かに、海部石床が言ったように、彼女を救えるのは、皇子たる大海人しかない。だが、飛鳥の都を見たこともなく、大王家からかえりみられることもない皇子に何ができよう。

否……。

何故に、かくも、己が弱さを、自ら論じ立てようとする？

まことに巫那を恋うているならば、恋うる心のままに、あの忌まわしい白幕の内より随^つれ出したはずではないか。

「皇子よ」

阿礼の言葉に、皇子の物思いは遮られた。

「皇子は、巫那について、何を知っている？」
「何を、とは？」

「巫那が、何故に、吾と二人、この洞ほらに住んでいたか、皇子は知るや？」
皇子は狼狽ろうたいえた。

「あるいは、吾が何故、この禁忌の地に住んでいるのか、皇子は知るや？」
「……否」

皇子は俯うつむいた。皇子は、巫那を恋うた。しかし、巫那について、何も知ろうとはしなかった。
「何故、皇子は問わなかった？」

阿礼は、海の方に貌かたちを向けたまま、言った。
「何故ならば……」

皇子ではなく、阿礼がその応えを告げた。

「皇子は、己がどのようにして生まれ、何故に大王家の皇子が伊勢の海部の邸やしきで育まれたか、知ろうとせぬ。故に、恋うる乙女の生まれを知ろうともしない」

「吾は知っている！」

皇子は立ち上がり、叫んだ。

「吾は、今はなき大王が子。かつて、田村皇子（たむらのみこ）、伊勢に到りて、海部の乙女と睦なごみみ合い、やがて吾が生まれた」

「されば……」

阿礼が貌かたちを向けて微笑ほほえんだ。

「皇子は、母の名を知るや？」

「母は死んだ。そう海部の長が言った」

「皇子が母の眠る塚つかはいづくにありや？」

「知らぬ」

「母は、何時、何故に死んだ？」

「知らぬ！」

「ならば！」

阿礼は立ち上がり、皇子に相對して言った。

「知れ！」

「如何に、それを知る？」

「飛鳥へ行け」

「飛鳥？」

皇子は、眼を見開き、阿礼を見つめた。阿礼は、皇子の腕を掴み、ねじこむように言葉を発した。
た。

「今は亡き汝が父なる田村大王たむらのおおきみ。今の大王は、かつては田村大王たむらのおおきみの後あと。飛鳥へ行き、大王の政事まつりごとをつぶさに見よ。しかる後に、再びここに来よ」

阿礼の臉まぶたから、一筋の涙がこぼれた。

「そのとき、皇子に、吾が知るありがままを、教えよう」

立ちつくす皇子の足下に、阿礼はくずおれるように坐した。しばし黙した後、口を開いた。

「丑那は、崖下の浜辺に、捨てられていた子。あまりに哀れ故、吾が拾って育てた。吾の知るさまざまな事どもを教えた」

阿礼は貌をあげ、皇子の方に見えぬ眼を向けた。

「丑那は聡い」

皇子は俯き、不安げな面持ちで言った。

「如何にして、吾は飛鳥へ……」

「いざれ」

阿礼は微笑んだ。

「飛鳥から、皇子を呼びに来る。それまで待て」

一月の後。

鏡郎女が、前触れもなく、一人の乙女を伴って、再び伊勢に現れた。

「安見娘。吾が同族」

海部の長の邸の広間に通された郎女は、傍らの乙女を指して言った。

年は十七くらいか。白い袴に水色の上衣、鏡郎女と同じく髪の毛を後ろに束ねて長く垂らし、広い額に濃い眉、聡げな大きな瞳。

「はるばる伊勢に来られたは……」

海部の長は、鏡郎女の言に随って他の者を去らせた後、問うた。

「何故に」

「大海人皇子の事」

鏡郎女は応えた。

「大王に、かの皇子の事を奏上し奉ったところ、疾う、飛鳥に呼び寄せ奉れ、と詔された」

「皇子を飛鳥へ？」

「然り。大王は、この年まで皇子を健やかに育み奉った海部の功を愛でたまひ、新たなる御宮造営のために命ぜられた壮丁五百を、二百に減らされた」

海部の長の頬が緩んだ。

「ただし、大海人皇子には、大王家の皇子にふさわしく、舍人を十人ばかりも付け奉るよう」

「諾」

海部の長は拝礼した。

「膳臣は……」

背を折って叩頭する長を見下ろしながら、鏡郎女は付け加えた。

「死んだ」

びくりと肩を振るわせ、貌をあげた長に、鏡郎女は冴え冴えと冷たい眼差しを浴びせ、傍らの安見娘を一瞥した。

「飛鳥へ還る道すがら、ふぐりの袋が石榴のように破れ、夥しく血を流し、ついに息絶えた」

「乙女の一蹴りで、哀れ、命までも失うとはな」

二人の女は、袖で口を隠しもせず、くすくすと笑った。蒼ざめて膝を乗り出した海部の長を、鏡郎女は手で制した。

「案ずるな。膳臣の死で、汝等が罰を受けることはない。ただ……」

「次よりは、吾等が、采女を集めに來ることになるやも」

安見娘が鏡郎女に目配せし、二人は声を揃えて笑った。

まさか、膳臣を殺したのは……。

海部の長は、膝の震えが止まらず、華やかに笑う女たちを見つめていた。